

## 高齢社会と教化

—老人ホーム「藤樹苑」での活動を通して—

原 豊寿

### 序

平成二年夏の自坊の施餓鬼のおりだった。総代を勤めて頂いている小野氏から、今年から老人ホームを開所したとの話を聞いた。それではということで、月に一度法話に行くことになり五年が過ぎた。この間、月に一度が二度になつた。自分の側のこの活動に対する比重が増大したからである。

老人達はおしなべて信仰心が深い人が多い。しかしながら、その信仰の対象である仏教の、基本的な事柄に関する知識が不足している事には驚かされた。信仰に知識など不要とも考えたが、釈迦がどんな人生を送ったのか、どんな事を教えとしてこの世に残したのか、また宗派とは何なのか、宗祖たちはどんな事を言っているのか、概要的な事柄だけでも伝えたいと思いつかれてきた。何度も同じような話の繰り返しで恐縮だったが、それなりにみんなの知識が深まつたように思う。般若心経も全員で声を揃えて読めるようになつた。しかし、私の側に厄介な疑問が生じた。それは、どんなに仏教に関する知識が増えようと、般若心経が読めようと老人達の救いにはなり得ないのではないか

かろうかと言う疑問だった。今、一体老人達はどんな問題を抱え、どのように生きようとしているのか。それに対し  
て仏教は有効な心の支えとなり得るのか、否か。宗教の本質的な目的はそこにあるように思える。

では一体どのような手段によりその目的が達成されるのかと言う事になると、甚だ心許ない事ながら、試行錯誤の  
連続に時を費やすしかない。この事例研究もまたそのような試行錯誤の一環にすぎないとは思うが、この五年をまと  
めたい私的な意図もあって、紀要に出筆する次第である。

### 【高齢化社会の現状】

国連の基準によれば高齢化社会とは、その国の全人口に対して六十五才以上の占める割合が7%を越える時その国  
は高齢化社会であると認定している。日本はすでに人口の十四%がそうであるから、かなり進んだ高齢化社会である  
と言える。地域によっては高齢化率三十%～五十%というところも数百か所に上っている。いわゆる過疎地域の町村  
である。また、西暦二〇〇一年には世界一の高齢化社会が、日本に現れることは間違いない事実である。戦後の団  
塊の世代と呼ばれる世代が一挙に六十五才以上の年齢に達すれば、この数字はもっと拡大されることとなる。(表1  
参照)

ではその家族形態はどのようにになっているのだろう。表2を参考すれば一目瞭然であるが、核家族化は急速に進行  
している。このような現状に対して経済企画庁国民生活局「長寿社会の構図」は次のように述べている。

「社会の基礎単位である家族が核家族化し、地域においても新たなネットワークの形成は不十分な状態にあるなど  
人々が孤立しがちな社会構造になっていること、また、そのような構造の中で社会の複雑化が進行していること、そ  
して急速に高齢化が進行していることなどから、さまざまな問題が発生している。」

## 高齢社会と教化

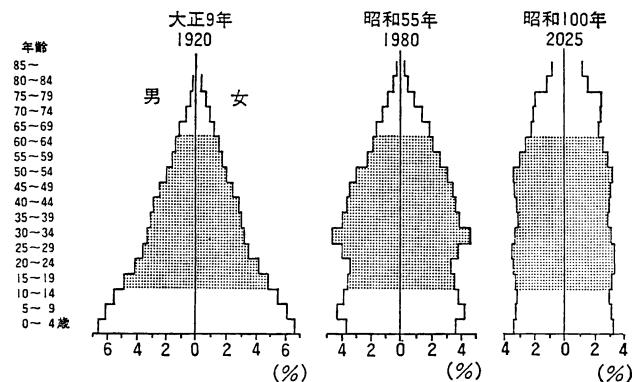


表1 日本の人口ピラミッドと生産人口

表2 老齢人口の推移

(単位：千人， %)

	人口									総人口比					
	総数			65歳以上			75歳以上			65歳以上			75歳以上		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計
昭和35(1960)	46,300	48,001	94,301	2,341	3,057	5,398	607	1,034	1,641	5.1	6.4	5.7	1.3	2.2	1.7
40(1965)	48,692	50,517	99,209	2,741	3,495	6,236	719	1,175	1,894	5.6	6.9	6.3	1.5	2.3	1.9
50(1975)	55,091	56,849	111,940	3,838	5,028	8,866	1,119	1,722	2,841	7.0	8.8	7.9	2.0	3.0	2.5
60(1985)	59,497	61,552	121,049	5,100	7,368	12,468	1,816	2,896	4,712	8.6	12.0	10.3	3.1	4.7	3.9
平成2(1990)	60,697	62,914	123,611	5,988	8,907	14,895	2,233	3,741	5,974	9.9	14.2	12.0	3.7	5.9	4.8
6(1994)	61,328	63,706	125,034	7,203	10,381	17,584	2,484	4,381	6,865	11.7	16.3	14.1	4.1	6.9	5.5
12(2000)	62,533	64,851	127,384	9,124	12,575	21,699	3,108	5,634	8,742	14.6	19.4	17.0	5.0	8.7	6.9
22(2010)	63,988	66,410	130,398	11,866	15,880	27,746	4,985	8,036	13,021	18.5	23.9	21.3	7.8	12.1	10.0
32(2020)	62,853	65,492	128,345	14,086	18,652	32,738	6,208	9,840	16,048	22.4	28.5	25.5	9.9	15.0	12.5
37(2025)	61,543	64,262	125,805	13,858	18,582	32,440	7,130	11,089	18,219	22.5	28.9	25.8	11.6	17.3	14.5

資料：平成6年までは総務庁統計局「国勢調査」及び「推計人口」、平成12年以後は厚生省人口問題研究所「日本の将来推計人口」（平成4年9月推計）の中位推計値

出典：長寿社会開発センター「老人福祉の手引き 平成7年版」

では、具体的な核家族化はどんな問題を高齢者に投げかけたのだろうか。検証してみよう。

東京・八王子の老人ホーム藤樹苑のデイサービスに通うAさんは、現在2DKのアパートに、妻と二人暮らしである。Aさん夫婦には二人の男子があるが、仕事の都合で遠方にいる。年に一~二度会う程度の交流である。妻は心臓が悪く家に引き籠りがちで、買い物なども非常につらい家事になっている。Aさんもまた戦争中に傷めた足に悩みがあり、立ち居が不自由である。デイサービスには送り迎えの制度があるので、Aさんは通うことにして決めたが、妻は病気が病気だけに通っていない。また、社交的ではない性格がそういうことに参加する意志を妨げている。

アパートの住人は若い人が多く、ほとんど交流はない。郷里も遠方であり、居住地域に同年代の知り合いはない。

このような二人の持っている生活信条は「周囲の人にできるかぎり迷惑をかけない」という事である。《事例①》

このAさんの事例には、現代の核家族化した日本の高齢者が抱える問題の典型的なものが潜んでいるように思える。

まず家族（三世代）が共に住む事を困難にしている社会の生活様式の問題である。農業生産をベースにした社会では家族はそれぞれが重要な生産の担い手であり、当然家族が結束している事が、あるいは地域社会が共に共通した価値観で結ばれている事が、必要不可欠な社会の条件であったといえるだろう。

では工業生産をベースにした社会はどうであろうか。先進工業国が多いヨーロッパの家族形態を見れば一目瞭然であるが、一人一人が経済動向に応じて移動し、職場を求めていけるような自在性が、家庭に求められるようになつて

いる。自在性は家族の構成員が多ければ多いほど失われる。いきおい家族は核化する事となるのは自明である。しかし、工業生産をベースにした国家、地域社会の登場は近代におけるイギリスの産業革命以後の事であり、欧米における孤独に悩む精神病質的な人々の増加は、またそのような人々への対応の難しさはよく知られているところである。これは工業生産をベースにした社会のコミュニケーション作りが立ち遅れている事に起因するところが大きいようである。それでもヨーロッパにおいてはスウェーデンにみられるように、それまで家族の内部で処理されてきた高齢者の問題を、社会全体で解決していくような高度福祉社会の実現によって、相当この問題をクリアしてきているような現状がある。

日本はといえば、世界有数の工業国になつたとはいえ、あまりに急速な社会変化に政策も地域社会の対応も立ち遅れの感がある。Aさんのケースでは、世間に迷惑をかけないようにと言う昔かたぎの信条と、地域社会の隣人に対する無関心さがその孤独さの度合いを深めているように見える。しばしば新聞の片隅に掲載される孤独な高齢者の死はこのような現状から生まれる。Aさんも世間と交流のない生活に危機を感じ、週に二日のデイサービスに通う決心をしたが、妻の具合が悪い時にはそれであまらない。いっそ、二人で老人ホームに入所しようかとも思うが、日本の制度では民間の有料老人ホーム以外公共的な老人ホームでは、夫婦二人とも重度心身障害者でないと、夫婦では入所できない。こういう国民生活に関する社会資本のことになると、日本は非常に遅れていると言わざるを得ない。国家は非常に豊かになつたが、国民は見た目ほどには豊かさを享受しているとは言いがたいものがあるのでなかろうか。いや、むしろそういう社会資本を豊かにすることに目をつぶつて、経済発展を優先に成長してきたようなふしが、日本にはある。しかしこのような問題の解決を国家に早急に要請しても、今後続くであろう経済的低迷期にあって、施設の拡充などが現状に合わせて成されるとは考えにくい。

そこで、現在、在宅ケアによる高齢者の介護が強く提唱され、そのためのボランティア活動が各地で展開されている。新しいヒューマンネットワークの誕生である。Aさん夫婦は未だこのようなケアを必要とするような状況にはないが、いざれはそのようになるであろう。Aさん夫婦に限らず、それは日本人の誰もがいざれはそのようになることは、誰の身上にも明らかである。

高齢者の現状を見ると、国民の眼前に露呈された悲しい事件があった。阪神の震災である。一九九五年一月十七日早晩に起こったこの震災における六五〇〇人近い犠牲者の過半数は六十才以上の高齢者であった。その後、小学校の体育館などに一時避難した人々で最後まで残つたのも高齢者がほとんどだった。帰るところがなかったのである。ほぼ一年以上を経過した今、仮設住宅に残る人々の九割がまた高齢者であるという。災害は必ず弱者に皺寄せが行くというが、世界第二位の経済大国の底辺部にはこうした貧困が横たわっているのであり、身近に迫る超高齢化社会に起こるであろう問題の悲惨さが予測されるところである。

### 【高齢者の心情】

高齢化社会の現状について概観してきたが、ではその社会を現実にいま生きている人々はどうのような心情を抱きながら、日々を暮らしているのであろうか？藤樹苑における聞き取り調査その他の事例を基に考えてみよう。

先の事例①に紹介したAさんの言葉である。

「嫁が年に二～三度、孫を連れて訪ねてくれるが、孫たちは日頃共に住んでいるわけではないせいか私たちにはなじまない。むしろ怖がつていい様子さえ見える。残念な事がしかたないね。」《事例②》

この言葉の中で愕然とするのは、「怖がつていい様子」という部分である。日常生活で老人と接する機会の少ない

子供にとって、老人のしわがれ、しみの多い皮膚や、変形した手足の指などは恐怖の対象となりうるのである。自分の孫たちにそのような態度に出られたAさんのショックは想像するに余りある。

アフリカのある部族の言語表現に次のようなものがあるそうである。その部族では孫が生まれると、男の子、女の子に係わらず祖父は「私が生まれた」祖母は「孫が私を生んでくれた」と言って祝うそうである。このような心情はどこの民族にもあるものである。日本では「孫は目に入れても痛くない」と言う表現をするが、この表現の裏にあるものは、孫の初々しい生命が老人にとって自らの不安な生命の再生に見える心情にはかならないのではなかろうか。このような心情を持つ老人にとって、孫が自分を恐がることが如何にショッキングなことか計り知れない。しかし、子供のそうした態度を責めるわけには行かない。日常、老人と接する機会の少ない子供にとっては、例えそれが祖父母であろうとその様子を目にする時、異様に映るのは自然な感情だからである。

さらには人間にはファミリーアイデンティティーというものがあつて、自分の周囲の誰が家族で、誰がそうでないかという識別を、ごく幼小期に確立してしまう本能のようなものを持つている。

以下は桃山学院大学教授・上野谷加代子女史の論文に掲載された事例である。(註①)

Bさん(四十才・女)一家は三人の男の子を抱える母子家庭である。どうして母子家庭になつたかと言えば、近所に住むBさんの実母が、寝たきり状態になつてしまつたことが遠因である。老人ホームに入れると言う夫と、在宅で看護したいと言い夫婦の対立が埋まらず、Bさんは実母の希望もあって在宅看護を選んだ結果、別居と言うことになったのである。幸い子供たちが協力的であつたために、実母はしだいに回復してきたが、肝心のBさんが今度は看病疲れからか、肝臓病を煩うこととなり入院ということになった。仕方がないので実母に特別養護老人ホームへの入所を勧めたが、実母は頑として受け入れなかつた。その態度に、子供たちもやりきれなさ

を覚えたのか祖母の看護をしなくなつた。《事例③》本文省略

この事例に見える家族は四つある。まず、Bさんと母親という家族。次に、Bさんと夫と子供たちの家族。さらにBさんと母親と子供たちという家族。もうひとつBさんと子供たちと言う家族である。Bさんのファミリーアイデンティティーは夫よりも母親の方により強く働いている事は、夫の言葉より母親を選んだ事により明白である。子供たちはと言えば、父親よりも、Bさんにより強いファミリーアイデンティティーを感じている。しかし、祖母に対しては、父親よりも弱いそれであり、母親に対して最も強いものを感じている。これは子供たちともっとも長い時間を過ごした者が、誰であるかと言う事と深い関係にあるようである。結果として、実母は家族の元からはじき出される結果となるのは火を見るよりも明らかである。そして、そのような家族の窮状から離れていった父親も、Bさんと子供たちという家族の中には戻り難くなつてしまつたであろう事は想像に難くない。

概して日本人の高齢者は家族に対する執着が強い傾向にある。老後は家族にててほしいと言う心情が底辺にあるのである。しかし、事例③に見えるように、一旦離れた自分の子供たちが別所で家族を形成した場合、後からその家族に参加していくのは容易な事ではないのである。

では次に家族と暮らす事をあきらめて、一人で生きていく決心をし、週一日のデイサービスを中心のよりどころとしているCさん（七十才・女性）の言葉を参考してみよう。

高齢化社会の進んだ現代の中で、私も七十年代の仲間入り。健康には注意をしていても、それでも予期せぬ事は起きます。気持ちだけは変わらないつもりでも、身体は老化して忘れる事が多く、覚えは悪い。

大事な事は「自分を知っているのは私自身なのだから、しっかりしていかなければ」と頭に言い聞かせて、元気な方をお手本に楽しい日を送りたいと願つております。一人で住む私にとって、デイサービスで過ごす時間

は、大勢の方とも知り合えてお話を喜びがあります。数々の作品、色々のお稽古、楽しい史跡めぐり、珍しい所も見学できて、嬉しく写真を取り出しては、心の宝だと幸せを感じております。また、行き届いた職員の方、講師の先生、寮母さんの優しい笑顔のお世話になって、日々、本当に有り難うございました。いつまでも統きますよう、宜しくお願ひ致します。《事例④》藤樹苑デイサービス文集「和」より

このCさんのように自宅に閉じこもることなく、世間と適度なコミュニケーションを保っている場合、あまり問題はないようと思えるが、やはり身体的な衰退に対する恐れは強いものがある。その身体的な衰退が精神に及ぼす影響についても彼女は不安なようである。したがって、デイサービスも休むことなく通っては、他の同年代の人々との交流を大事にしている。社交的なCさんの性格が自分自身を救っているといえるだろう。おしなべてデイサービスに通うような高齢者は、外向的でおしゃべり好きな活潑な人が多い。しかし日本人の国民性から言えば、このような性向は比較的の少数に当たるのではないかと思われる。特に男性においてはどうもデイサービスのようなコミュニケーションは苦手のようである。それは参加者の九割以上が女性であることからも見てとれる。日本語に「井戸端会議」という言葉があるが、これは、もし日本語にもヨーロッパ語のように女性名詞と男性名詞のような区別があれば、さしづめ女性名詞に当たるような言葉だろう。それほどデイサービスの日常の様子は、女性たちのおしゃべりの社交場という観がある。その一ヶ月のカリキュラムを見ても、キメコミニ人形の作成や、書道、あるいはダンスなど女性向きのカリキュラムが多い。それはそれで参加者の大半が女性なのだから仕方ない事なのだが、男性にも魅力的なカリキュラムにしていく事が今後は必要にならう。また、男性の側の老後の意識変革のよくな、現状に合わせた努力が求められるところである。

高齢者の心情を考える時、見逃せないのが「死」への心情である。

二年ほど前だったが、藤樹苑の一日旅行に参加した時の事である。バスの隣の座席に座った男性のDさんに、財布の中のニトログリセリンを見せてもらつた事がある。次はそのDさんの言葉である。

「方丈さん。私の友達はこれですよ。三年前に心臓発作を起こしてからは手放せなくなりました。もう家内もなくして、一人だから惜しいという命でもないけれども、生きている限りは生きていたいからね。若い頃は娘を見る時に心臓がときどきして、ああ、心臓があるんだなと意識したが、この頃はいつまで動いてくれるんだろうと思つて心臓を意識しているよ。」《事例⑤》

Dさんはそう言つて笑つていたが、それから半年が過ぎたころ「くなつた。私がそれを知つたのはその死から一ヶ月後である。老人ホームの人々はそのようにいつの間にか姿が見えなくなる。

Fさん（八十二才・女性）の言葉を紹介しよう。

クリスマス会の時、水・土コースの鈴木さんにお逢いできる事を楽しみにしていましたが、十二月二十一日に、亡くなった事を初めて知りました。私は何とも言ひようがなく、自然と涙が出て止まりませんでした。主人を六年前に亡くした時と、同じ悲しみです。その夜はなかなか寝つかれませんでした。自宅に遊びにいった事や、何でも話し合える友達として心を許しあつた鈴木さんでした。お悔やみにお伺いした折に形見分けまでいただき思い出として大切にします。鈴木さん、ご冥福をお祈り致します。《事例⑥》藤樹苑デイサービス文集「和」より

老人ホーム「藤樹苑」では平均して、一年に五名～六名の方が亡くなる。それは致し方のないことではあるが、回りから一人また一人と友人、知人が居なくなる寂しさは想像するに余りある。このような集団は他には見られない。人間はいざれは死ぬのであるから、その確率の高い老人の集団がそのような側面を持つことは自然なことなのだが、

老人たちの抑鬱傾向や不安感に少なからず拍車をかけていることは否めまい。

では老人にとって「死」のイメージとは何なのだろうか？伝統的には「仏になる」という短い言葉の中にそのイメージは集約されていたであろうが、信仰心の薄い一般的の傾向にあって、必ずしもこの言葉は死のイメージとして支拂されにくくなっている。もちろん、信仰心に篤い人にとってはそれは重要なイメージであるが。藤樹苑において直接的な質問（少し無神経な質問ではあったが）によって調査した結果は、圧倒的に「終わり」という言葉が多かつた。現実主義的な老人の心情が見える言葉であるが、これは他の世代でも多数を占める答のように思える。また次のような考え方が多くたことにも注目された。「死ぬ事はもはやそれほど怖くはないけれども、死に方が問題だね。」死が本来的には人間苦の典型である事からして、「幸福な死」という言葉が成立するかどうか一考の余地はあるが、「幸福な死の方」は確かにあるであろう。例えばポックリ寺に集まる参詣者の数を見てもそれは明らかである。しかし、日本人は意外にポックリ逝くのである。統計を見ると、日本人の死因の年齢別順位によれば百人のうち三十七人は心臓脳血管障害で死ぬ。二十五人が癌。残りが肺炎その他である。癌にしても発症から一年以内の死亡率は高い。それでもポックリ寺は賑う。何故か？ 家族への懸念が第一に挙げられる。家族の重い負担を要する「寝つきり」や「痴呆」状態に陥る事は、老人にとって最大の不安なのである。

「家族に看取られながら、畠の上で、短い療養で逝けるような病氣による死に方。」

このような死に方を老人たちは望み、しばしば口にするのである。一見、平凡に属するであろうこののような死に方が、現実には困難な事になってしまっている事実に現実の老人の孤独と悩み多い心情が見えるように思う。

## 【教化の視点】

「ああ短いかな、人の命よ。百歳に達せずして死す。たといそれよりも長く生きたとしても、また老衰のために死す」中村元訳「スッタニ・パータ第四・六・「老い」より

仏教の教祖たる釈迦は八十の齢を生きた人であった。その晩年において、シャカ族の滅亡という事件に際し、攻め手であるコーサラ国の王に「親族の蔭は涼しい」と幾度も述べて、三度王の進軍を遮ったといふ阿含経。極めて率直な、老境の言葉のように思う。人間だけがその誕生から死に至るまで、家族のことを思う動物であるということの裏返しは、それが無ければ生きられぬということである。

私は平成七年秋に、千葉県海上郡にある滝郷学園という養護施設を訪ねたことがあるがその家族の無い子供たちに對して、園長・土川峰仙師をはじめ保母の人達が実の親のように、兄弟のようにあるまつておられる様子を見た。目覗めて泣く二歳の子供を抱きあげてあやす土川師の姿に、良寛のような崇高さを感じた。鳥の卵は必ず親鳥によつて暖めてやらねばかえらないが、同様に人間もまた幼少期には特に親の、家族の愛情が無ければ調和のとれた人格は育たない。学園の人々はその親の役目の代わりをしておられるのだろう。

それはまた老年期においてもそうではなかろうか。釈尊はその最後にあたり、アナンダの献身的な介護により看取られる。もはやシャカ一族は滅亡して無かつたが、その残された親族の一人であり弟子の一人であるアナンダがそれ以上の愛情を示したのである。以下はその様子である。

「まあ、アナンダよ、おまえは私に、上衣を四重にして敷いておくれ。アナンダよ、私は疲れた。私は座りたいのだ。」

「かしこまりました、尊者よ。」

仏陀の言われるとおりに、アナンダは座をしつらえた。そこに座るやいなや、仏陀は幼児が母に甘えるように、

「ああ、アナンダよ。私に水を持ってきておくれ。私は喉が渴いているのだ。アナンダよ私は水が飲みたいのだ。」と催促した。

愛弟子アナンダは、早速、水をくんできし上げた。

このアナンダの、そして、土川師の生き方は教化のあり方の重要な側面を示唆しているように思える。仏教ではこのような行為を利他行というが、「慈悲心の発露」とも言う。この慈悲心という仏教のキーワードとも言うべき言葉については、すでにあらゆる解釈がなされているが、私は「人間の他者との補償作用」を示す言葉として解釈している。即ち不完全な者としてこの世に存在する人間は、集団を構成することにより、互いにその不完全さを補っているが、その補い合って完全な者になろうとする心の働きを、慈悲という言葉で表していると思うのである。更にその慈悲心の発露により、布施行がなされる。その心と行為を結ぶ媒体として、言語が介在する。

このような視点から土川師の行為を観れば、親の愛情のない子供に対し愛情を補い、その子供の成長を完全なものにしようとする行為といふうに、受けとめられる。アナンダの行為はと言えば、身体機能の衰退した釈尊の、その身体機能の代わりを誠実に勤めようとする様子が見てとれる。教師には常にこのような姿勢が求められる。しかし、このような行為に多くの教化者の陥穰がつきまとう事を反省しなければならない。

ここで、智山教化資料第十七集に掲載された廣澤隆之師の言葉を参考してみよう。

「現代の老人問題が、当然の如く、老人福祉の問題として問われているが、仏教的にその福祉はどうに関与するかは、決定的な根拠を教理的にも、教理の展開史の上にも見いだす事は困難である。

それは当たり前と言つてしまえば当たり前で、一人一人の人生の決定の仕方として老いは問われるのが宗教の立場であり、仏教もそれを追求した。」

教師の陥りやすい問題がここには指摘されているようと思う。対峙する人間の現実的問題に係わるあまり、本質的宗教の役割をどこかに置き忘れてしまうのである。

「律藏」にある有名な話は教訓である。

その時釈尊は樹木の下で瞑想していた。そこに一人の青年が現れた。彼は仲間と遊びに来ていたのだが、連れ立つた遊女に持ち物を盗まれてしまい、探し回るうちに、釈尊に出会ったのである。釈尊は言う。

「貴方がたは、持ち物を盗んだ遊女を捜すのと、自己を探し求めるのとどちらが大事と考えますか?」

当然のことながら、釈尊は若者に手を貸して、この遊女を捜そうとはしない。若者の行動をじっと観察し、その本質的誤りを指摘するのみである。そして、釈尊は「自己を探せ」というのである。これは大日經に言う「如實知自心」に通じるものだろう。蓋し、真言宗の基本的教化の眼目はそこにあると言える。釈尊の八十年の長い生涯も、まさに「自己を探す」旅程ではなかつたか?

平成八年二月、私は十数人の仲間と共にインド仏跡を巡礼した。その折、前正覚山と呼ばれる釈尊と五比丘らの苦行の山と、ブッダガヤの間を流れる尼連禪河の岸に立ちながら真なる自己との邂逅を目指す青年ゴータマの姿を偲んだ。前正覚山とブッダガヤとは見たところ十キロメーターにも及ばないような距離に見えたが、釈尊にとって、それは苦行から成道への苦しく長い距離であったようと思う。アフガン出土の「苦行の釈迦像」に多くの人がひかれるように、自分とは何かを厳しく追求する姿そのものに、教化の真髓があるといえよう。

高齢者に対する教化においても、このような教化の視点は重要であると考える。もはや自分を厳しく追求すること

など終えたような観のある高齢者でさへ、自分に対する悩みは多いものである。何故なら、齢を重ねること自体、（周囲にそのような人が多く居たとしても）自身にとっては未踏の事だからである。日々、衰退していく自分の肉体や知能に、彼はおののき、必死に抵抗しようとする。悲しい事ながら、勝ち目のない戦である事を知りながら、彼はなお戦い続ける。我々教師はその戦いに何の手助けもできない。ただ、励ますのみである。教師自身、いはずれはそのような事態を迎える者としての共感だけが、表明できる同胞としての手向けであるようだ。私は現在四十五才になろうとして居るが六十五才になる二十年後、藤樹苑に通う今日の人々の幾人がこの世に存命して居るだろうか。言うまでもない事ながら、それは私自身の事さえ解らない。だからこそ、生きている現在時を刻々過ぎ行く生命の最前线において、「自分とは何か?」を追求し続ける姿勢が大切なのだろうと思う。釈尊、並びに宗祖、弘法大師の生涯を概観する時、このコンセプト（基本姿勢）は共通している。そして、それが生涯貫かれた姿を見る時我々は感動し、教化されるのではないだろうか。

### 【まとめ】

以上三章にわたり考察を進めたが、結論を釈尊の次の言葉に求めようと思う。

「もしも他人を教誡すると同じように自己を教誡するならば、自己は実によく調御されているから、他人をよく調御する事ができよう。ただし、自己は調御したいものといわれるから。

自己こそ自己の主である。他の誰が主であろうか。自己がよく調御されたならば、人は得がたい主を得る。」

ダンマバダ「自己の章」より

この言葉は我々教師に対する究竟の教誡である。多くを説明する要はないが、この言葉を懐深く自覚しなければ、

教化は単に仏教の宣伝部門になり果てる。釈尊の、空海の言葉をいくら宣伝しても、人は教化されることはないだろう事は、経験的にも明白である。それらの言葉を自己のものとし、自己の人生の灯明とする時、教えは自己において血肉となり、他者への更なる伝道の意義を見いだすことができる。

高齢者に対する教化という時もこれはしかりである。「自ら老いる者」であるという自覚と、その自覚による深刻な問題意識こそが教化の原点であり、視点である。釈尊がそうであったように。

## 註

① 「高齢者と家族」 P.39 上野谷加代子著

## 参考文献

「ブッダの言葉スッタニパータ」 中村元訳

「ゴーダマ・ブッダ」 早島鏡正著

「高齢化社会の設計」 古川俊之著

「智山教化資料第16集」

「長寿社会の構図」 経済企画庁国民生活局